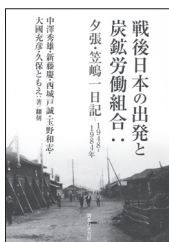


中澤秀雄・新藤慶・西城戸誠・玉野和志・
大國充彦・久保ともえ著／翻刻

『戦後日本の出発と炭鉱労働組合』

——夕張・笠嶋一日記
——1948-1984年』



紹介者：島西 智輝

本書は、第2次世界大戦後に北海道炭礦汽船（以下、北炭）で炭鉱労働者・労働組合リーダーとしてのキャリアを歩んできた^{かさしまはじめ}笠嶋一氏の日記および自伝の一部を翻刻し、解説を付したものである。笠嶋氏は、1929年に秋田に生まれ、1947年に秋田県立能代工業学校（現・能代工業高校）を卒業後、地元^{かみ}に事業所があった帝国石油（現・INPEX）に就職した。仕事のかたわら青年会活動や公民館建設運動に従事していたが、1948年秋に北海道の夕張で働いていた大叔父を頼りに渡道し、北炭夕張炭業所に就職した。新夕張⁽¹⁾で坑内保安、採炭などを担当した後、1950年末に労働組合常任委員（青年婦人対策・情宣の専従）となった。以後、労働組合専従者・労働者として、1980年代半ばまで数々の閉山や炭鉱災害を経験してきた。本書の大部分は、笠嶋氏のキャリアの初期時点にあたる、1948年から1951年の日記の翻刻である。

著者・翻刻者（以下、著者）は、評者も参加

している産炭地研究会（JAFCOF: Japan association for the study of former coalfield）のメンバーであり、近年、石炭産業や産炭地に関する共同研究の成果を継続的に発表している（中澤・嶋崎 2018 など）。歴史学において、日記をはじめとしたエゴ・ドキュメント研究への関心が高まりつつある現在（長谷川編 2020 など）、本書の刊行は時宜になつたものと言える。

それでは、本書の目次を紹介しよう（カッコ内は執筆者名、第二部後半の細目次は略）。

はじめに

第一部 解説

1. 敗戦後炭鉱における労働と生活（中澤秀雄）
2. 公民館運動と青年社会教育（新藤慶）
3. 映画・演劇のかかわりからみる笠嶋氏の労働組合運動（西城戸誠）
4. 一九五〇年前後の政治史と炭鉱労働組合（玉野和志）

第二部 日記等翻刻

〔前半〕 笠嶋日記 1948-51 と注釈

〔後半〕 「わが人生」より労働組合幹部としての記録

本文 430 頁のうち、第一部は 50 頁余りであり、第二部の日記の翻刻が 300 頁以上、自伝（「わが人生」）の翻刻が 60 頁弱である。第一部では、主として労働運動史・社会運動史の観点から著者による詳細な解説が付されており、第二部後半では 1960 年代～1980 年代半ばにおける労働組合幹部としての笠嶋氏の活動が自伝から翻刻されている。メインである第二部前半の

(1) 同鉱は、明治期から稼行していた新夕張炭鉱を北炭が併合した後、しばらく新夕張と称されていたが、1938年に夕張第三礦に改称された。しかし、戦後も日常的に新夕張（鉱）と呼ばれていたようで、1945年10月に同礦で結成された労働組合の名称は新夕張労働組合であった（七十年史編纂委員会編（1958）557-558、組合史編纂委員会編（1963）288-311）。

日記部分には、著者による多数の注釈が付されており、炭鉱や労働運動に明るくない読者にも丁寧な配慮がされている。他者が読むことを前提としておらず、誤字や脱字がそのままの場合も多い日記を翻刻するだけでなく、多数の注釈を付すことは大変手間のかかる作業であるが、その手間を惜しまなかった著者に敬意を表したい。

続いて、評者が関心をもった部分を中心に、本書の日記部分について内容を紹介します。

(1) 秋田時代～渡道 (1948年1月～10月半ば)

この期間の日記では、著者解説に記されている公民館建設運動にくわえて、帝国石油での油田探査作業の内容や労働争議について記されている。石油採掘の作業の一端、および国内石油業の苦境が垣間見える。また、笠嶋家は農業にくわえて馬産業も営んでおり、笠嶋氏が帝国石油での勤務の合間にこれらの作業に従事していたことが記録されている。国鉄でも「半農半鉄」の地域があったことは知られているが、秋田の石油業でも、専門化が徹底せず、「半農半油」が見られていたことがうかがえる。さらに、笠嶋氏はバスケットボールの強豪校として著名だった能代工業の出身であり、卒業後もバスケットボールをはじめ、バレーボール、野球などに打ち込むスポーツマンであった。これらの練習・試合や母校での練習も記録されている。なお、スポーツは北炭就職後も継続して行っている。

日記には、渡道というキャリアの一大転換の決断へと向かう思考の過程は記されておらず、9月に夕張の大叔父へ手紙を書いたことが記されるのみである (108頁)。ただし、10月10日

の離郷にあたっては「炭鉱労働者の高給に目があった事は眞なり」「日増しに新しさを加へる次代の動きを親父のやせすねをかじらず、独力にて学びたく未開の北海道の自然叢を採勝し、道の人となりし叔父並びに血族を訪れる」(113頁)と記され、炭鉱労働の高賃金の魅力と独立の希望が語られる。

(2) 北炭夕張新鉱での坑内労働者時代(1948年10月半ば～1950年12月初め)

笠嶋氏は、当初坑内で爆発事故予防のための岩粉散布を主業務とする間接部門に配属されたが、賃金が低いため、採炭への配属を希望して受け入れられ、12月から採炭の後山⁽²⁾として働き始めた。著者解説で述べられているように(15-18頁)、この時期の日記には採炭現場の状況や作業内容が記録されている。これらの記録からは、過酷な現場労働、職制による現場管理の不備などが明らかであるが、徐々に記述が簡略化されてくるようにも見える。労働による疲労の蓄積や現状変革を目指す労働運動への意欲の高まりにくわえて、おそらくは採炭先山を目指すのは適性面などから難しいと笠嶋氏自身が自覚するようになったことが影響したと考えられる。

笠嶋氏の炭鉱労働運動は、寮生闘争に始まる。3月には寮連協⁽³⁾の新夕張寮闘争委員に最高得票で選出された(205頁)。以後、寮設備の改善や賄い費問題など、寮生活の改善闘争を展開した。こうした闘争について、笠嶋氏は「身近かな所より寮の改善をして関心を高かめ一人一人の革命化を目指す己の意思に近づいた」と述べている(209頁)。評者はかつて北海道の三井砂川炭鉱で福利厚生闘争が大衆闘争

(2) 石炭を掘る作業に従事する先山と組み、石炭運搬や坑道補修などに従事する者の呼称。

(3) 北炭には複数の寮があり、寮生が協議会を結成して賄い費などの問題に取り組んでいた。寮連協の正式名称は不明である。

へと展開していった過程を考察したが（島西 2004）、笠嶋氏の記録から、夕張では寮生闘争が大衆闘争への経路のひとつであったことがうかがえる。

労働運動への意欲の高まりと並行して、労働組合の運動方針や「ダラ幹」への批判も増加してくる。この点と関連して興味深いのは、笠嶋氏がアカハタを購読し、いわゆる民同の反共姿勢を批判する一方、1948年に結成された労働者農民党（労農党）への期待が示されていることである。この点は、笠嶋氏が労働組合常任委員に当選した1950年12月以降の時期にはやや変化するが、55年体制成立までの政治や労働運動における労農党の位置づけを考えるうえで、示唆に富んだ記録である。

(3) 労働組合専従時代（1950年12月～1951年末）

上述したように、笠嶋氏は1950年12月の労働組合役員選挙に立候補し、常任委員に当選する。専従となった笠嶋氏は労働運動で多忙な日々を送りつつ、スポーツ、帰省、恋愛など多彩な青年期を過ごしている。ここで注目されるのは、笠嶋氏が記録している労働組合専従者の地道かつ多忙な日常活動である。夕張内外の組合会議出席やオルグ活動はもとより、議事録作成・整理、宿直、サークルとの会合、映写機や幻灯機の借り受け・返却など、情宣担当ということもあるが、業務は非常に多い。労働組合専従の職務とは何か、という関心を喚起された。

日記には、労働組合主催の文化・娯楽活動への関心の低下も記録されている。文化・娯楽活動は、労働運動のなかでも重要な活動のひとつであるが、レコードコンサートや映画上映など

のなかには、期待されたほどの集客が実現しなかったものも見られた。著者解説でも笠嶋氏が鑑賞した映画・演劇が紹介されているように（28-40頁）、本書は、労働者の文化・娯楽活動についても、興味深い事実を教えてくれる。

本書でもっとも惜しむらくは、日記の画像が収録されていないことである⁽⁴⁾。本書には、日記の「豫記」や、笠嶋氏が道内外を移動した際の経路の略図は収録されているが、笠嶋氏の字体、「豫記」以外の書き込み、そして挟み込み資料などがどのようなものであったかがほぼ不明である。この点は、日記資料としての情報にやや欠けることは否めない。たとえば、作家・火野葦平のインパール作戦従軍日記の翻刻書は、火野の特徴的な字体、火野の自筆スケッチ、および火野が入手した伝単などの挟み込み資料の画像を掲載することで、火野の人となりや従軍の様子を読者にいっそう想起させてくれる（火野 2017）。本書の理解を深めるためにも、著者には、日記の画像の公開を期待したい。

ともあれ、本書は、笠嶋氏の丁寧な記録と著者の翻刻作業により、非常に優れた日記資料となっていることは疑いない。石炭産業史のみならず、戦後史に関心のある読者には、本書を一読することを強く勧めたい。

（中澤秀雄・新藤慶・西城戸誠・玉野和志・大國充彦・久保ともえ著／翻刻『戦後日本の出発と炭鉱労働組合——夕張・笠嶋一日記—1948-1984年』御茶の水書房、2022年10月、430 + xxiii頁、定価9,680円（税込））

（しまにし・ともき 立教大学経済学部教授）

【参考文献】

組合史編纂委員会編（1963）『新夕張と共に——闘う炭

(4) 注釈の膨大な分量と比べれば些少であるが、注釈の誤記も散見される。一例をあげれば、1949年の日記の注釈に「労働災害保険法が存在しなかった」（164頁）とあるが、労働者災害補償保険法の公布は1947年である。

- 『礦労働者の記録』新夕張炭礦労働組合
- 島西智輝（2004）「炭鉱労働組合運動における大衆闘争の形成に関する考察——戦後復興期の三井鉱山砂川炭鉱労働組合の事例を中心に」『三田商学研究』第47巻第6号，53-78頁
- 中澤秀雄・嶋崎尚子編著（2018）『炭鉱と「日本の奇跡」——石炭の多面性を掘り直す』青弓社
- 七十年史編纂委員会編（1958）『七十年史』北海道炭礦汽船株式会社
- 長谷川貴彦編（2020）『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店
- 火野葦平著（渡辺考・増田周子解説）（2017）『インパール作戦従軍記——葦平「従軍手帖」全文翻刻』集英社